

(様式6-A) A. 雑誌発表論文による学位申請の場合

村山侑里氏から学位申請のため提出された論文の審査要旨

題目 Association between Depressive State and Lifestyle Factors among Residents in a Rural Area in Japan: A Cross-Sectional Study

(日本の農村部におけるうつ状態と生活習慣との関連性の検討)

The Tohoku Journal of Experimental Medicine 第249巻:101頁～111頁、2019年
Yuri Murayama, Ken Inoue, Chiho Yamazaki, Satomi Kameo, Minato Nakazawa, Hiroshi Koyama

論文の要旨及び判定理由

本研究は、医療過疎地域におけるうつ状態と生活習慣の関連を検討したものである。2012年に群馬県の農村部(人口約5,000人)で質問紙調査を行った。質問紙は公衆衛生学教室が独自に開発した「こころのチェックシート」を用い、うつ状態の判定には「THI抑うつ尺度項目(THI-D)」を用いた。915名からアンケートを回収した。

平均年齢は60.5歳で、THI-Dからうつ状態にあると判定された者は27名(3%)だった。「睡眠不足もしくは過眠」「飲酒しない」「運動習慣が週に1回以下」「孤独感」「対人関係の悩み」「経済的な悩み」を有していると回答した群は、そうでない群に比べTHI-Dの抑うつスコアの平均値が有意に高かった。さらにロジスティック回帰分析を行い、オッズ比を算出した。「私生活の対人的悩み」「経済苦」「疾病苦」が抑うつスコアに正の影響を与える因子として、「運動習慣」「友人数」「良好な睡眠」が抑うつスコアを低減させる因子として選択された。さらに構造方程式モデリング(SEM)を行い、年齢(60歳以上/未満)および性別で4群に分けて作成し、それぞれ適合度の高いモデルが得られた。各群で抑うつスコアと関連がある2つの潜在因子が抽出され、一つは4群ともに共通してみられる因子で、仕事や私生活での悩みであり、特に対人関係の悩みが重要であることが示された。もう一つの潜在因子は各群で異なり、年齢や性別といった属性により抑うつスコアに影響を与える変数が異なることが示された。さらに、THI-Dの10項目に対してコレスポネンス分析を行った。男女とも共通して抑うつ状態が低い原点付近に「自信のなさ(T10)」や「元気の無さ(T1)」がプロットされ、抑うつ状態が強い原点から離れた位置に「憂鬱感(T8)」や「引け目を感じる(T7)」がプロットされ、抑うつ状態の強さによって自覚される症状に順序があることが示された。うつ症状の順序水準に関する報告はほとんどなく、うつ状態の各症状の近縁性を明らかにしたのは新たな知見であり、うつ症状の評価の上で有用であると考えられた。

本研究で得られた医療過疎地域の農村部におけるうつ状態と生活習慣との関連についての知見は、地域での自殺防止や抑うつ状態の予防対策を行う際や、臨床でのうつ状態の診断・治療場面においても状態の評価に示唆を与える重要な知見であると認められ、博士(医学)の学位に値するものと判定した。

令和元年12月25日

審査委員

主査 群馬大学教授 (医学系研究科)
神経精神医学分野担任 福田 正 人 印

副査 群馬大学教授 (医学系研究科)
応用生理学分野担任 鯉 淵 典 之 印

副査 群馬大学教授 (医学系研究科)
救急医学分野担任 大 嶋 清 宏 印

参考論文

なし

(様式6, 2頁目)

最終試験の結果の要旨

共分散構造分析の利点と限界について、および、一般集団におけるうつ症状とうつ病の症状の差異について試問し満足すべき解答を得た。

令和元年 12 月 25 日

試験委員

群馬大学教授 (医学系研究科)
公衆衛生学分野担任 小 山 洋 印

群馬大学教授 (医学系研究科)
神経精神医学分野担任 福 田 正 人 印

試験科目

主専攻分野 公衆衛生学 A

副専攻分野 神経精神医学 A